

事務局から

▼研究所通信121号にもお知らせしておりますように、検討委員会による今後の研究所のすすめ方の審議結果について、会員の皆さんに「はがき」によるアンケートをお願いしたいと考えております。それ故、厳しい財政事情で、今回、「読者カード」を、同封しておりません。あしからずご了承ください。今号についての感想を含めたご意見をファックスあるいはインターネットのメール等でお寄せ頂ければ幸いです。

▼夙川学院短期大学(兵庫)の斉藤尚志さんから、干溝自主小学校の調査研究のため、当時の関係者の方々の紹介依頼を受け、干溝地域の方々を紹介いたしました。1970年代初に始まる干溝小学校存続の運動は小さな学校を守ろうとした十数年にわたる地域教育運動です。そのなかで自主学校が生まれました。その後の様子も含め、研究成果に期待したいと思えます。

▼次号では子ども時代に戦争体験をされた方々の原稿を募集します。ご応募をお待ちしています。
(内山)

編集後記

▼大震災の小特集を組みました。震災から3カ月余が過ぎていくのに未だ復興のきざしも見えてきません。学校を失い、家族や友だちを失った子どもたちが、テレビカメラを向けられると明るく元気な返事をしていますが、心中を考えると、その健気さが不憫でなりません。

▼今回の大震災の報道に関連して言葉の軽さが気になります。いわく「粘り強い東北人」。この東北人観の背後には明治以来の政治的差別や偏見を感じます。善意から使っているのでしょうか、ある固定観念で見えていないだろうか。若者の意識は変化しています。もうひとつ「想定外」。言葉の背後にはある種の政治判断による恣意的線引きが透けて見えます。

▼6月にスペインのカタルーニャ国際賞を受賞した村上春樹氏はその授賞式でのスピーチでこういっています。

歪んだ構造の存在(注・原発について)をこれまで許してきた、あるいは黙認してきた我々自身をも糾弾しなくてはならない

でしよう。今回の事態は、我々の倫理や規範に深くかかわる問題であるからです。
(毎日新聞「6月17日付」)

▼子どもの学力については点数に現れた学力ばかり問題にする傾向がありますが、もっと地域のもつ子育て力に注目する必要があります。前号にひきつづき佐渡の地域がもつ子育ての力についての論考を2本載せました。
(大滝)

にいがたの教育情報 No. 106

2011年6月30日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所
発行人 小林 昭 三
〒951-8116
新潟市中央区東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025)228-2924
振替口座・00640-0-12332
Eメール kyoiku@triton.ocn.ne.jp
印刷所・神林印刷
TEL 0254-66-7959

本誌内容の無断転載を禁じます。